

# 再出仕の契機

—『枕草子』の〈問〉と〈答〉—

渡 邊 舞

## はじめに

『枕草子』の日記的章段において、清少納言が中宮定子や殿上人たちの〈問〉に答えてみせる場面は多く見られる。二八〇段「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」<sup>注1</sup>における、定子の「香炉峰の雪いかならん」という〈問〉に応じる清少納言の行動といった問答の形式は、野村精一氏によって「定子下問、清女応答」と、それに準ずる形で「貴人下問」と読み取られており、〈問〉と〈答〉の基本構造とされてきた。<sup>注2</sup><sup>注3</sup>

そして、その基本構造のなかには様々な〈問〉と〈答〉が見られる。一般的に〈問〉と〈答〉としてよくいわれるものは、香炉峰の雪などのように和歌や漢詩といった何らかの典拠をめぐるものであろう。しかし、後述する二五九段のように、知識に関わらない〈問〉と〈答〉も『枕草子』には描かれている。それらは問

う側と答える側の共有した出来事、時間といった、いわゆる「記憶」をめぐるものであり、〈問〉と〈答〉の形式は章段ごとに異なっている。

また、清少納言と定子の交わした〈問〉と〈答〉を年時の確かな章段の順に見ていくと、定子の〈問〉にも、清少納言の〈答〉にも変化が見られる。定子の〈問〉は明確なキーワードを伴った〈問〉から、答える側の感性にまかせたものへ。清少納言の〈答〉は、定子の〈問〉に従うままであった宮仕え初期の〈答〉から、定子の〈問〉を誘発するようなふるまいを伴った、より積極的に清少納言の側が〈問〉と〈答〉の場をつくろうという動きが見られるようになる。

関白の娘であり、中宮、皇后となった定子と、一介の女房に過ぎない清少納言の二人は、大きな身分差のある主従関係ながらも、それ以上の結びつきを感じさせる。〈問〉と〈答〉は、そう

した二人の感性と、結びつきの根幹を考えるうえでも、また、両者の関係性がこの作品の主題といかに結び付いているかを考えるうえでも、欠かせない研究対象ではないだろうか。

なかでも清少納言の里居と再出仕を描いた一三七段「殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来」では、中閨白家の凋落を背景に、複雑な〈問〉と〈答〉が交わされている。清少納言と定子にとって大きな転機を描く当該章段の考察はこれまでも数多く試みられてきた。本稿では〈問〉と〈答〉に秘められた思いや関係性を、本文に沿って考察していきたい。

### 清少納言の里居と源経房

日記的章段には珍しく、「殿などのおはしまさで後」とおおよその年時を示す書き出しから始まる一三七段は、清少納言が長期にわたる里居中であることも示している。

殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来、さわがしうなりて、宮もまゐらせたまはず、小二条殿といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里にあたり。御前わたりのおぼつかなきにこそ、なほえ絶えてあるまじかりける。

道隆薨去後で、かつ清少納言の里居期間であることが窺える当

該章段冒頭は、長徳二年の秋の頃と考えられ、長きにわたる里居の理由は次のように語られる。<sup>注4</sup>

げにいかならむと思ひまゐらす御けしきにはあらで、候ふ人たちなどの、「左の大殿方の人知る筋にてあり」とて、さしつどひ物など言ふも、下よりまゐる見ては、ふと言ひやみ、はなち出でたるけしきなるが、見ならはずにくければ、「まゐれ」など度々ある仰せ言をも過ぐして、げに久しくなりにけるを、また宮のへんには、ただあなたがたに言ひなして、そら言なども出で来べし。

定子の父道隆の薨去、兄弟の伊周・隆家左遷の後であるこの頃、清少納言は道長方との内通者であるという噂により、他の女房たちから疑心暗鬼の目で見られていた。その不快さによって長期の里居をしていたのである。

清少納言の里居先は限られた人物しか知らなかったようで、そのなかの一人が当該章段に登場する右中将、源経房である。経房は源高明の四男で、道長の猶子となった人物である。斉信でさえも則光に問いただした清少納言の居場所を知る数少ない人物<sup>注5</sup>として名が挙がるほどの関係であり、跋文には『枕草子』流布に関わる人物として登場している。

清少納言が道長方の人間ではないかと疑う女房たちをより警戒

させかねない経房との接触であるが、一三七段における経房は、里居中の清少納言に定子周辺の様子を伝え、出仕を促す人物として描かれる。

右中将おはしまして物語したまふ。「今日、宮にまゐりたりつれば、いみじう物こそあはれなりつれ。女房の装束、裳、唐衣をりにあひ、たゆまで候ふかな。御簾のそばのあきたりつるより見入れつれば、八、九人ばかり朽葉の唐衣、薄色の裳に、紫苑、萩などをかしうてゐ並みたりつるかな。御前の草のいとしげきを、『などか、かきはらはせてこそ』と言ひつれば、『ことさら露置かせて御覧ずとて』と、宰相の君の声にていらへつるが、をかしうもおぼえつるかな。『御里居、いと心憂し。かかる所に住ませたまはむほどは、いみじき事ありとも、かならず候ふべきものにおぼしめされたるに、かひなく』とあまた言ひつる。語り聞かせたてまつれとなめりかし。まゐりて見たまへ。あはれなりつる所のさまかな。台の前に植ゑられたりける牡丹などの、をかしき事』などのたまふ。

経房が語るののは、女房たちの折に合った装い、宰相の君の見事な返答、そして再出仕のすすめである。

ここで特に注目すべきは、御前の草を「などか、かきはらはせ

てこそ」と問う経房に、わざと草を生やしているのだと返した宰相の君であろう。小二条殿の手入れが行き届いていないともとれる様子を、定子後宮の女房らしい見事な返答でもって払拭し「をかしうもおぼえつるかな」と経房を感じさせることに成功している。経房から語られる様子はまさに、清少納言が里居以前に身を置いていた場の面影を色濃く残した、心ひかれ、帰りたいと思う場の様子であつたのではないだろうか。

経房の語る風雅な様子はこれだけではない。「をかしき事」と語る牡丹も、その一つであろう。折に合うと評された女房たちの装いは秋であるが、牡丹は夏の花である。一見すると季節が合わず、矛盾が生じているようにも思えてしまう。しかし、古典文学大系、『枕草子解環』のほか、能因本を底本としている『枕草子全注釈』などでは、先に挙げた宰相の君と経房の間答も含め、『白氏文集』を踏まえている可能性が指摘されている。

経房は、小二条殿の秋色や朋輩女房の意外な心もちい、女房たちの清少納言に対する批判と期待などを語り伝えて帰参を促していたが、最終的な決め手として、中宮の淋しいご心境を、露台の前の枯れ枯れな牡丹の葉と、『白楽天詩集』巻九「秋題牡丹叢」の詩境に託して、清少納言の頑なに閉じた心を開こうと試みた。清少納言の漢詩・唐様好みに調子を合

わせたのである。<sup>注6</sup>

『白氏文集「秋題牡丹草叢」における「牡丹」は、花の盛りではなく秋のわびしげな様子を表す枯れかかった「牡丹」である。一三七段における「牡丹」が『白氏文集』を踏まえたものであると捉えると、経房は咲いている状態の、牡丹そのものの美しさを清少納言に伝えたのではなく、小二条殿の寂しげではありながらも定子後宮らしさの衰えない風雅な姿を伝えた、と考えられる。経房の語る「牡丹」は季節を違えて咲いたものではなく、また、当該場面が夏であることを示す役割を担ったものでもない。秋にふさわしい「枯れた牡丹」と解釈するべきである。

経房の語る定子周辺は、清少納言にすぐにでも戻りたいと思われるような、衰えることのない風雅な場である。しかしそれだけでは、清少納言を再出仕させるまでには到らなかった。

### 再出仕を決意させる〈問〉——山吹の花——

一三七段に記される経房来訪とは別のある時、定子からの文が届けられる。この文が、清少納言に再出仕を決意させるのである。

例ならず仰せ言などなくて、日ごろになれば、心細くてうちながむるほどに、長女、文を持て来たり。「御前より宰

相の君して、しのびて給はせたりつる」と言ひて、ここにてさへひきしのぶるもあまりなり。人づての仰せ書にはあらぬなめりと、胸つぶれてとくあげたれば、紙にはものも書かせたまはず、山吹の花びらただ一重を包ませたまへり。それに「言はで思ふぞ」と書かせたまへる、いみじう、日ごろの絶え間嘆かれたる、みななぐさめてうれしきに、

宰相の君を経由して内密に届けられたのは「山吹の花びらただ一重」と、そこに書かれた「言はで思ふぞ」の言葉であった。「例ならず」と、それまでであった仰せ言がしばらく絶えていた後の定子からの働きかけに、清少納言は喜ぶ。

従来、この「山吹」と「言はで思ふぞ」に込められた真意の考察が様々な視点で試みられてきたが、未だ定説を見ない。諸説を再検討しつつ、まずは「山吹」の考察を試みる。

山吹は、晩春から初夏にかけて黄色の花を咲かせる。このことからまず問題とされるのが、当該場面の季節であろう。諸説の多くは、一三七段冒頭の経房来訪から「日ごろ」、数日後と考えるため、秋であるという前提のもと考察が進められてきた。<sup>注7</sup>その前提のもと本来の季節とは異なる「山吹」を、秋に咲いた<sup>注8</sup>返り咲きとして再出仕を促すという意味を見出す説、あるいは造花や押し<sup>注9</sup>花であるとする説が挙げられる。

返り咲きが再出仕を意味するという解釈は不自然なものではなく、山吹の返り咲きが和歌に詠まれている例もある。<sup>注10</sup>しかし、本文中に返り咲きであることを示す記述はどこにもない。また、造花や押し花は現実問題としては可能であるが、いずれにしろ季節の異なるものをわざわざ用意する趣向が定子にあっただろうか。当該場面を秋として考察を進めると「山吹」に必要な以上の意味を付与せざるを得なくなり、何らかの点で強引な解釈となってしまうのである。

そのため本稿では、この「山吹」を季節通り晩春に咲いたものと考えたい。当該場面を春と考える説としては、鷺山茂雄氏、赤間恵都子氏の論が挙げられる。鷺山氏は季節に合わぬものを用いることの無風流さを指摘し、たとえそれが造花であったとしても、山吹の花が贈られたのは長徳二年の秋より先の長徳三年の春ではないかという見解を示した。

鷺山氏の論をさらに深めたのが赤間氏の論である。赤間氏は鷺山氏と同じく経房来訪の話と山吹の話が異なる季節の記事である可能性を提示したうえで、『枕草子』の記事のつなぎ方に着目し、次のように述べている。

『枕草子』においては、必ずしも前の記事の時間をうけて記事がつながれるのではなく、作者の語ろうとする事件の流れ

に沿って記事がながれ、時間が展開するということがある。この特徴は、作者が語りたいと思う気持ちの強い部分ほど顕著に現れ、それに伴って内面描写の記述も現れることになるのではないだろうか。作者の心中思惟によってつながれている「殿などのおはしまさで後」の段の第一話と第二話の間にも、同様な時間的な隔たりが想定される可能性は十分にあると思われる。<sup>注12</sup>

鷺山氏、赤間氏の論に沿って、山吹の花が贈られたのが長徳三年の春であるとする、長徳二年秋説と比較して里居期間がさらに長期化するという問題が浮上する。しかし、長徳三年の春というのは定子にとって、清少納言を迎えるのに適した時期だったのではないだろうか。

既に赤間氏によって指摘されているが、懷妊中の身であった定子の周辺で様々な出来事の続いた秋よりも、里居の期間は一年に近い長さとなるが、「伊周・隆家大赦の機運とも合い、定子も出産後、体力を回復した頃」であり「山吹の花の季節に合致する」<sup>注13</sup>春の方が、清少納言の戻りやすい環境が整ったとも考え得る。

経房来訪の話を秋、当該場面を春という別々の季節で考え、と、山吹は季節に反することなく春に咲いた花となる。とはいえず、そのぶん清少納言の里居は長期化する。長引けば長引くほど

「また宮のへんには、ただあなたがたに言ひなして、そら言なども出て来べし」と、戻りたい状況へと悪化していく。再出仕には並々ならぬ決意が必要となり、山吹は、そうした再出仕のきっかけをもたらす花なのである。「山吹」には一年近い迷いの中から再出仕へと踏み切らせる、どのような〈問〉がこめられていたのだろうか。

まず第一に、晩春の歌題である山吹は、その色が梔子色であることから「口無し」が多く連想されてきたことに留意したい。当該章段によれば、それまで度々あった仰せ言が「例ならず」絶えたことにより、清少納言が「心細く」いささか気弱になっている折に山吹の花びらは贈られた。山吹の有する「口無し」と定子の姿が重なるように、むしろ常と異なる仰せ言の途絶えは「口無し」のための演出だったのではないかとさえ考えられよう。

「口無し」には、仰せ言のない「口無し」の定子を意味するほかに、引歌の「くちなし」も考えられる。諸説あるなかでも、本稿では『古今和歌集』にある素性法師の歌「山吹の花色衣ぬしや誰問へどこたへずくちなしにして」を引くと考える。

里居の折、清少納言が道長方からの誘惑をうけて身の振り方に悩んでいたと考える大島秀男氏もまた、「ぬしや誰」と問う歌を挙げて「清少納言にとってその答は自明でなければならない。帰

る所は唯一つの筈である」<sup>注14</sup>と論じているが、この歌にはそのような脅迫的な意味を見るよりも、それまでの仰せ言の代わりとしての役割を見出すべきだろう。つまり定子は山吹の花を用いて自らを「口無し」と見立てた演出を施しただけでなく、「ぬしや誰」と問いかける意をも想起させ、「お前の主は誰なのか、出仕して示してほしい」という、再出仕を促す意味も込められていたと見るべきではないだろうか。

山吹の花、「口無し」の定子は、仰せ言はせずとも清少納言の再出仕を待っていると、その花びら一重で示し、さらに「言はで思ふぞ」の言葉にその心情を託したのである。

### 再出仕を促す〈問〉——「言はで思ふぞ」——

定子が山吹の花びらに書き記したのは、「言はで思ふぞ」という言葉である。『古今和歌六帖』の「心には下行く水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる」から引かれた言葉は、従来誰の心情を託したものか諸説論じられてきた。定子自身の心情を託したとする説と、清少納言の「言はで思ふぞ」の心情を定子が理解しているとする説である。

なかでも両説を提示したうえで、赤間氏は「作者が何より書きたかったのは、二人がお互いに「言はで思ふ」心で通じ合ってい

たことなのであり、この一句がわざわざ山吹の花びらに書かれたことの意味もそこにあることは確かだろう」と、他とは異なる見解を示している。しかしこれに反論した坪美奈子氏は、「言はで思ふ」を清少納言の心情とし、「そなたの心は（このとおり）全て理解されている」というメッセージである」という見解を示している。

「言はで思ふぞ」が誰の心情を指すかいまひとつ決着がつかない最大の理由は、定子も清少納言も共に「言はで思ふ」状態にあるからであろう。「口無し」の演出なのか、別の事情もあったのか、いずれにしてもしばらく仰せ言を絶っていた定子も、また定子の仰せ言に応じずに里居を続けている清少納言も、そのどちらに当てはめても「言はで思ふぞ」の意味は生きてくるのである。

そのうえで、定子は「口無し」を連想させる山吹の花に加え、「言はで思ふぞ」に、清少納言を思う心情、そして清少納言の再出仕を望む意向を託したのではないだろうか。仰せ言に応じない、あるいは里居の長期化により今さら応じられなくなってしまう清少納言の「口無し」の状態をも取り込み、「お前も『口無し』であるけれど、その心には私と同じ『言はで思ふ』気持ちがあるでしょう」と問いかけていると解釈すれば、赤間氏と同様、「言はで思ふぞ」がどちらか一方の心情を示したものはな

く、定子と清少納言両者の心情、二重の意味が託された言葉であると読み取れるのではないだろうか。

定子はこの言葉について「にくき歌なれど、このをりは、言ひつべかりとなむ思ふを。おほかた見つかけでは、しばしもえこそなぐまじけれ」と清少納言再出仕の際に弁解している。「言はで思ふぞ」が「にくき歌」となるのは、伝えるべき心情をあまりにも率直に示す歌だからであろう。香炉峰の雪や「草の庵」のように典拠の全体を想起してはじめて真意が解せるものではなく、「言はで思ふぞ」だけで溢れんばかりの相手への思いが伝わってしまう歌だったことに、気恥ずかしさのようなものがあつたのだろう。

才気煥発なやりとりよりもストレートな感情が優先される「言はで思ふぞ」は、定子にとっては「にくき歌」であるが、だからこそ頑なに里居を続ける清少納言の心に響くものとして選ばれたのである。そしてそれは、「例ならず仰せ言などもなくて、日ごろになれば、心細くてうちながむるほど」、定子の沈黙が続いたことで清少納言のなかに定子とのつながりが切れてしまうのではないかという心細さが生まれていた頃に届けられたものであった。両者の思いが同じであることを求め再確認するように、それぞれの状況、心情を託した「言はで思ふぞ」は、「口無し」である定子から、同じく「口無し」となっている清少納言へ「ぬしや

誰」という思いが込められた「山吹」に書きつけられて届けられるのである。

こうしたたつた一重の花びらに込めていくその風雅な演出と率直な思いは、仕えていた頃と変わらない才気煥発な定子の姿を清少納言に伝えたはずである。里居が長期化した原因である様々な不安や葛藤を乗り越えて清少納言が再出仕したのは、そういつたこれからも仕え続けたいと思える定子の姿と心情が、その〈問〉からありありと窺えたからであらう。

### 再出仕という〈答〉

長期にわたる里居のなかでの定子の〈問〉に対し、清少納言はどのような〈答〉を返したのだろうか。この〈答〉は、清少納言が今後定子後宮で自らがどのような存在で在ろうとしているのか、その片鱗を窺わせるものでもある。そのなかで定子の〈問〉に対する最も重要な〈答〉は、まずは再出仕するという行動そのものであった。

御返りまゐらせて、すこしほど経てまゐりたる。いかがと、例よりはつつましくて、御几帳にはた隠れて候ふを、「あれは今まゐりか」など笑はせたまひて、「にくき歌なれど、このをりは、言ひつべかりとなむ思ふを。おほかた見つ

けでは、しばしもえこそなぐまじけれ」などのたまはせて、かはりたる御けしきもなし。童に教へられり事などを啓すれば、いみじう笑ひたまひて、

定子に返事を送った数日後、一年近くの長きにわたる里居を終えて、清少納言は出仕する。その清少納言を迎えたのは疑惑の混ざった視線でも、暖かい感動的な空気でもなく、柄にもなく気恥ずかしげな清少納言の様子を、「あれは今まゐりか」とからかう定子の言葉であった。

以前と変わらぬ定子の姿は、清少納言をどれだけ安堵させたことだろう。大げさに迎えるより、あくまで自然に招き入れることが、この時は最良の形であった。そして、「あれは今まゐりか」にどう対応するかが、清少納言の再出仕の第一歩となるのである。

清少納言が選択したのは、「言はで思ふぞ」の返事を書くとした折、その上の句を「忘れてしまった」話の披露であった。

御返事書きてまゐらせむとするに、この歌の本さらに忘れたり。「いとあやし。同じ古ごとといひながら、知らぬ人やはある。ただここにおほえながら言ひ出でられねば、いかにぞや」など言ふを聞きて、前にゐたるが、「『下ゆく水』とこそ申せ」と言ひたる。などかく忘れつるならむ。これに教へらるるも、をかし。



知っていて当然のものを忘れ、童女に教えられてしまうという失敗を、笑い話として清少納言は語る。従来、清少納言の上句忘却をめぐる二つの説が論じられてきた。単純な度忘れとする説と、意図的な忘却というポーズとする説である。前者は宮仕え生活から離れたことによる反応の鈍さや清少納言と定子の関係崩壊の予兆を読み取り、<sup>注17</sup>後者は忘却のポーズの真意を問うてきた。<sup>注18</sup>道長方からの誘惑があったことを懸命に隠そうとしたとする説、<sup>注19</sup>道化を装う度忘れという形で、忿懣のないことを示すとする説、<sup>注20</sup>「言はで思ふぞ言ふにまさ」<sup>注21</sup>っていることを示すため、「言わない」という胸中の〈思い〉を、「言わない」で〈言う〉方法として〈忘れた〉という奇計に行き着いたとする説など、多様な視点で考察が試みられてきた。

本稿では、清少納言の上の句忘却そのものは単なる忘れか、定子の仰せへの感動によるものであったとして、忘却をわざわざ再出仕最初の話として披露したことを重視したい。なぜならば、定子への文の返事を書くにあたり「言はで思ふぞ」の上の句はそれほど重要ではないからである。「山吹」と「言はで思ふぞ」で定子の意図は十分に伝わっており、その思いに対しての〈答〉が求められているのであって、上の句を答えることが求められた〈問〉ではないのである。

清少納言にとって〈答〉とは、いかにその場にふさわしい形で発問者の心情を汲むか、ということの主軸として生み出されるものであり、その歌を知っていますと披露することが主軸ではない。事実、童に教えられた歌をふまえて返した返歌そのものについて言及はない。強引に再出仕させることはしない、できない定子からの「言はで思ふぞ」という〈問〉、あるいは再出仕に居心地悪げな清少納言に「あれは今参りか」と声をかける〈問〉に對し、どういった〈答〉を返すが主となっているのである。このとき、「歌の上の句を忘れたことが、この章段の中でいかなる意味を持つかを考えなければならない」と小森氏が指摘する<sup>注21</sup>ように、着目すべきは上の句を忘れたことではなく、忘れたことを繰り返し書き記していることである。清少納言は他の女房たちも同座する場で、定子に堂々と「忘れた」顛末を報告し、再出仕前に送った返事の内容には一切触れていない。そのことにどんな〈答〉がこめられていたのだろうか。

長期の里居から自らのもとへ戻った清少納言を、定子は新参の女房かと評した。「宮にはじめて参りたるころ」のように几帳に隠れるように伺候していた清少納言の姿が定子にそう言わたのであるが、清少納言はその言葉を受け取って、上の句忘却を語るのである。誰もが知っているような歌の上の句を忘れてしまう、

それこそ「今まゐり」のような清少納言が出来上がる。清少納言が演じてみせたのは、長期の里居から再出仕を果たした女房ではなく、「今まゐり」の初々しい、いやそれを通り越した気の利かない、粗忽で道化じみた女房であった。

忘却を強調すればするほど清少納言の道化ぶりは際立ち、定子の「今まゐりか」という呼びかけを受けて演じた笑いも生きてくる。一七七段「宮にはじめてまゐりたるころ」の「葛城の神もしばし」にも通じつつ、それ以上に当意即妙な演技の面白さは、「いみじう笑」う定子が全てを物語っているといえよう。

二人のこの応酬は、定子のもとに戻ってきたという実感を清少納言に与えると同時に、鬱屈とした里居から抜け出し、気持ちも新たに女房生活を再スタートさせる転機となったと思われる。『枕草子』の道隆薨去後の出来事を記したいわゆる後期章段では、前期章段において「笑ひ」を担っていた道隆や伊周に代わり、清少納言やその他の人々が道化となり「笑ひ」を生み出していく。そうした道化の役をも引き受け演ずるという意思が、当該場面から読み取れるのである。

### 謎々合せが意味するもの

新参女房のように振る舞い、道化役を自ら買って出た清少納言に、定子はある謎々合の話を語る。

謎々合せの得意な人が、ある謎々合せの左の一に立候補する。当日までの間、味方である左方の人々は左の一が考えている謎について問うたが、左の一は機嫌を悪くするだけで教えてくれない。左の一が謎々合せの当日に出した謎は、「天に張り弓」という誰でも答えられるような謎だった。右方の人々は自分たちの勝ちだと喜び、左方の人々は左の一が実は右方に通じていたのではないかと疑い出す。左の一の謎があまりに簡単であるため、答えるべき右の一もおどけた仕草で「これはわからないぞ」と言うほどだったが、右の一が「わからない」と言ったことを理由に、左の一は強引に左方の勝ちとしてしまう。その後も左の一が論じ勝たせたおかげで左方は勝利し、わからないいそぶりでふざけた右の一は、敗北した右方の人々から恨まれたのだった。

以上が定子の語る謎々合せの概要である。定子の語った話をここまで長々と詳細に書き記すからには、そこに特別な意味が込められていると考えるのが自然である。この謎々合せの意味をどう解釈するかによって、章段全体の意味合いも変わってこよう。

先行諸説のなかでも最も問題となっているのが、謎々合せの話を現実に照らし合わせた場合の配役である。

左の一を定子、右の一を清少納言とし、左方右方の人々を女房たちとする説や、左の一を清少納言、左方を定子後宮の女房たち、右方の人々を道長方勢力とする説<sup>注22</sup>、左の一を道長、右の一と右方の人々を中閤白家とする説など、これまで様々な考察が試みられてきた。しかし、謎々合せの話と現実を重ねて見ようとすればするほど、矛盾が生じてしまっている。よって、本稿では前述の上の句忘却の流れから本文に沿って文脈を追っていくことで、謎々合せの意味を考えたい。

清少納言の上の句忘却の話に笑った定子は、「さる事ぞある。あまりあなづる古ごとなどは、さもありぬべし」と言い、そのついでにと謎々合せの話を始める。このことから、清少納言の上の句忘却と謎々合せの話のどこかに、繋がる部分があるのだと見るべきである。

まず忘却と類似するのは、右の一が「わからない」と言ったことであろう。わざと「忘れた」というポーズをとる清少納言と、本当は答えがわかっているのに「わからない」と言った右の一の姿が重なるのである。これについては小川幸三氏の指摘があり、次のように述べている。

定子は、上句亡失と言うのは嘘でしょう、実は、忘れたというところで古歌の趣旨の場を実現。それで私への想いを伝えようとしているのはとくにお見通し。もうそろそろ自状しないと、右の方人のように本当に知らなかった（忘れた）ということになってしまいますよ、と言っているのだと思われる。<sup>注23</sup>

つまり定子は、清少納言が「忘れた」というポーズをとったことを理解したうえで、謎々合せの話をしたことになる。清少納言の〈答〉、道化としての振る舞いを理解していると示しており、〈問〉と〈答〉の応酬がまだ密かに続けられている形になるのである。

本文の流れに沿って考えれば、清少納言と右の一の類似が見出せる。にもかかわらず左の一に清少納言を当てはめる説が多いのは、敵に見えて実は味方だったという左の一と一三七段での清少納言の立場が類似していること、何よりも謎々合せの話が左の一を中心に語られていることに拠る。もし右の一に清少納言をあてはめるのであれば、右の一の側から、謎々合せの話を語ってもよいはずである。しかし謎々合せの話は、あくまで左の一に焦点があてられ進んでいく。

左の一に名乗り出た人物は、謎々合せ当日に「天に張り弓」と

至極簡単な謎を出したことで、左方の人々に当初右方の味方だったのではないかと疑われる。この姿は、道長方の人々と親しいがゆえに疑いのまなざしを向けられた清少納言の姿に重なるものとして解釈されてきた。

清少納言と左の 하나가重なるかのように話す定子の目的は、いったい何か。遠田氏は「中宮の挿話は裏切り者として白眼視された清少納言をそれとなく庇う中宮の寛容と思いやりを物語るエピソードとして素直に理解できるのである」<sup>注26</sup>と述べている。敵かと思われた左の一は左方に勝利をもたらしているため「敵かと思われた者は味方であり、こちらにとつて頼りになる存在である」と訴えかけることが可能となる、ということだろうか。女房たちの疑心暗鬼となつた気持ちと和らげ、清少納言をも救う解釈が成立するため、左の一を清少納言と考える説も捨てきれないのが現状である。それでは清少納言と右の一の類似、そして清少納言と左の一の類似、その両方を解釈に組み込むことはできないだろうか。

定子の話に、章段の流れに沿って耳を傾けてみよう。清少納言の上の句忘却話は、「忘れた」というポーズとの類似から右の一の話を含む謎々合せの話が引き出されたように思えるが、その後長々と語られる話を聞くうちに、「忘れた」というポーズを取ら

せた、敵だったかと思われた左の 하나가、左方に勝利をもたらす味方であつたという物語であつたことがわかってくる。定子の長々しい話は、その長々しさゆえに、ゆつくりと、しかし確実にその方向性を移していく。

長々と語られる謎々合せの話は、誰に誰をあてはめるという理屈以上に、話によつてもたらされる効果を考察の中心に置くべきであろう。定子の長い話は、「忘れた」は嘘でしょうという清少納言への問いかけと、疑心暗鬼に陥っていた女房たちへの語りかけと、二つの意味をゆるやかに結んで、同座する人々の心を煙に巻く不思議な面白さをもっているのである。

### 謎々合せの理解

清少納言の上の句忘却の話は「度忘れ」と解釈すると、わざとわからないと言つた右の一との完全な一致は成立しない。このことから、定子と清少納言との間にはずれが生じているという解釈<sup>注27</sup>も発生する。その説を決定づけていたのが、末尾の「これは、忘れたる事は、ただみな知りたる事とかや」（三巻本の本文）の一文である。多くの注で、辻褄の合わない定子の話に承服しかねる言葉、あるいは定子の話の真意を理解しきれないものとして捉えられてきたが、久保木秀夫氏はこの一文に着目することで、清

少納言の〈答〉の忘却と定子の話の関係を見出そうと試みた。<sup>注28</sup>

久保木氏はこの一文を曖昧にしている「とかや」に着目し、平安時代における「とかや」の用例を検証した。結果、最も多く見られた用法が引用句に付属する用法であることから、「皆知りたること」が他文献からの引用句である可能性が高いことを指摘し「古今和歌六帖」と『法華経』の二例を挙げ、『法華経』を用いた解釈が場面に沿ったものであるとした。

謎々合せの話は女房たち全員への訓話であり、清少納言のみがその真意を見抜いた、と久保木氏は指摘する。他の女房たちは表面的な、歌をど忘れする話だと思っただけで聞いていたと解釈するため、清少納言は女房達の言動に対し「これは忘れたることかは」(能因本の本文による)と異議を唱え、そして「ただ皆知りたることとかや」と定子の話を定義付けているとした。

確かに末尾の一文は曖昧で、意味がはっきりしない。しかし、だからといって清少納言も定子の話の真意をはかりかねていると解釈し、そこに清少納言と定子のずれを読み取るのはいかがなものだろうか。久保木氏同様、清少納言は定子の話を理解したものであると本稿でも解釈したい。

また、もう一つの可能性として、この曖昧な書き方はあえてそうしていると考えられるのではないだろうか。定子の話

の真意を理解したからといって、それを事細かに書かなくてはいけないという決まりはない。女房たち、そして清少納言への思いやりが感じられる謎々合せの話は、左の一のように飄々と、煙にまかくのようにごまかすためにあのような形で結ばれた可能性も浮上してくるのである。

### 〈問〉と〈答〉と再出仕

清少納言に再出仕を決意させたのは、定子と交わした〈問〉と〈答〉であった。仰せ言にもなかなか応じない頑なな清少納言の心を動かしたのは、より率直な感情が込められた定子の〈問〉である。

一三七段の再出仕に関わる〈問〉と〈答〉は、他章段の〈問〉と〈答〉より複雑な、複数の意味を読み取るべきものである。また、一度のやり取りで終わらずに問い、答えることを繰り返す、〈答〉が同時に〈問〉でもある問答であった。「山吹」と「言はで思ふぞ」は、頑なに里居を続ける清少納言の行為への定子の〈答〉であると同時に、お前はどうか、こうなのだろうという〈問〉でもある。恥ずかしげな再出仕はこの定子の〈問〉への〈答〉であると同時に、「今参りか」という〈問〉を誘う行為でもあり、その〈答〉である上句忘却話は、不思議な謎々合わせの話

を引き出す《問》となっている。清少納言と定子の交わす《問》と《答》は、知識の披露が主軸ではなく、丁寧に発止なやり取りの中に言葉以上のつながりが垣間見えるものである。この《問》と《答》こそ、清少納言が定子のもとに戻った理由であり、今後も定子に仕え続けるという決意表明、誓いが込められた行為なのであった。

一三七段と同じく清少納言里居の頃を記す二五九段では「世の中の腹立たしうむつかしう、かた時あるべき心地もせで、ただいづちも行きもしなばやと思ふ」時に、白い紙や高麗縁の畳の筵があれば心が安まり、生き長らえようという気持ちになるといふ清少納言の過去の発言が冒頭に記される。その後「心から思ひ乱るる事ありて、里にある」清少納言の長期里居の頃、定子から紙と畳が下賜されたのであった。紙の下賜は清少納言の過去の発言を記憶に留めていた定子によって発せられた、「これで気持ち安らぐか」という《問》である。「思ひ忘れたりつる事をおぼしおかせたまへりけるは、なほただ人にてだにをかしかべし」と清少納言が感動しているように、本人でさえも忘れてしまったことを記憶して、絶妙なタイミングで発した《問》なのである。これに対し、清少納言は下賜された紙を「草子」にして書く、『枕草子』の原点を思わせる行為で《答》を返したとある。この《問》と

《答》も、何ともスリリングで、複数の意味を内包した問答である。とりわけ、和歌や漢詩などの知識ではなく、清少納言の過去の発言、定子と清少納言が共有した記憶、思い出をめぐっての交流であることを重視せねばならない。

また、周知のように跋文では、一三七段と同様に里居中に源経房が訪れて、その際畳に載せたまま差し出すというミスがきっかけで、『枕草子』が世間に流布したと語られる。二五九段もまた里居中の話として、定子とのスリリングで感動的な《問》と《答》のなかで草子が作られたことを明かしている。そして一三七段では、複雑な、複数の意味を内包した《問》と《答》のなかに、清少納言の再出仕を語る。そこに見られるのは、単なる知識のやりとりでない、人間と人間が触れ合うスリリングな《問》と《答》の姿である。

一度は定子のもとを離れた、離れざるをえなかった清少納言が一年近い年月の果てに再出仕を果たし、その後も仕え続けた根幹には、中宮と一介の女房という身分を越えた《問》と《答》によるつながりがあり、それが『枕草子』執筆の原動力でもあったのではないだろうか。

注

注1 『枕草子』本文、章段番号および章段名は、全て『新編日本古典文学全集』18（小学館 一九九七年十一月）に拠る。

注2 野村精一「枕草子の文体―その説話性について―」（『枕草子講座』一有精堂 一九七五年十月）

注3 三田村雅子「枕草子の〈問〉と〈答〉―日記的章段の論理をめぐって―」（『国語と国文学』一九八八年一月）初出／「〈問〉と〈答〉―日記的章段の論理―」と改題し『枕草子 表現の論理』（有精堂 一九九五年二月）に所収。冒頭にて野村論が紹介される。

注4 萩谷朴「枕草子解環四」（同朋舎 一九八三年四月）

注5 『枕草子』八〇段「里にまかでたるに」には、「このたびいづくとなべてには知らせず、左中将経房の君、済政の君などばかりぞ知りたまへる」という記述がある。

注6 萩谷朴「枕草子解環三」（同朋舎 一九八二年十二月）

注7 池田亀鑑「枕草子小二条宮を主題とする諸段について」（『中古文学論考』一九四三年初出／『研究枕草子』至文堂 一九六三年所収）をはじめとした多くの研究者が秋説を提唱している。

注8 鷺山茂雄「秋の牡丹・秋の山吹―『枕草子』「殿などのおはしまさで後」の段の史実年時考証再考」（『立正大学国語国文』24 一九八三年三月）

注9 坏美奈子「『枕草子』「長徳の姿」関連章段の解釈―後宮の視点によっ

て描かれた政変」（『中古文学』71 二〇〇三年五月／『新しい枕草子論 主題・手法 そして本文』新典社 二〇〇四年四月所収）

注10 遠田昭良「『枕草子』日記章段の考察―「殿などのおはしまさで後」の段の解釈をめぐって」（『札幌大学女子短期大学部紀要』25 一九九五年三月）和泉式部の歌などを例に挙げている。

注11 当時の造花の例として、『枕草子』二二六〇段には梅の頃に、造花の桜が見られる。押し花に関しては、坏美奈子氏が前掲注9「新しい枕草子論 主題・手法 そして本文」で押し花にした山吹の花に「言はで思ふぞ」と書いたものを紹介している。

注12 赤間恵都子「枕草子「殿などのおはしまさで後」の段 年時考―山吹の花の季節から」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』1 一九九五年三月／『枕草子日記的章段の研究』三省堂 二〇〇九年三月所収）

注13 前掲注12に同じ。

注14 大島秀男「定子の寓話―枕草子一三八段をめぐって―」（『平安朝文学研究』2・3 一九六七年四月）

注15 前掲注12に同じ。

注16 前掲注9に同じ。

注17 前掲注3、小森潔「殿などのおはしまさで後」の段を読む」（『立教高等学校研究紀要』18 一九八七年十二月）など。

注18 前掲注14に同じ。

注19 前掲注10に同じ。

注20 小川幸三「言はで思ふ」のパフォーマンス―『枕草子』「殿などのお

はしまさで後」段の「謎」話——〔国語国文研究と教育〕 44 二〇〇  
六年三月）

注 21 前掲注17に同じ。

注 22 前掲注14に同じ。

注 23 黒木香「清少納言の再出仕と定子の話——謎々合の話の意味するもの

——」〔活水論文集（日本文学科編）〕 38 一九九五年三月）

注 24 前掲注17に同じ。

注 25 前掲注20に同じ。

注 26 前掲注10に同じ。

注 27 前掲注3に同じ。

注 28 久保木秀夫「枕草子の謎々合——「皆知りたることとかや」考」〔中古  
文学〕 59 一九九七年五月）

（わたなべ まい 二〇一三年修士課程修了）